

2014.6.1 「夕べがあり、朝があった」創世記1:1～2:4a

この天地創造物語をどう見るか。人類発祥の出来事、神が6日間でこの世を造り上げた物語として聞き、またそう教えてこなかったか。そういう外から見る客観的な視点、遠くから眺める物語として見るのではなく、この物語が記され、まとめられた時代背景をもとに、私たちもこの天地創造の壮大な恵みの中にあることに気づかされて天地創造の恵みに与かっていきたい。

この物語が記され、まとめられた時代は、紀元前6世紀頃だとされる。アブラハムの時代よりも、イスラエル国が栄えたダビデの時代、ソロモンの時代よりも後に記されている。その時代は、南ユダ国がバビロニア帝国に滅ぼされ、捕囚の民として連行され、異国バビロンで生きることを余儀なくされた時代、暗黒の時代にこの天地創造物語は記され、まとめられた。祖国を失い、失望に満ち、地は混沌で闇が満ち、天と地が別々のものであるかのように思える状況、神などいないと嘆きの声が聞こえてくる状況に民は置かれていた。しかしユダの民は、その状況の中で神の言葉を見出す。闇だけの世界、絶望の世界と思い込んでいたところに光が灯され、闇の世界に朝が来る。「夕べがあり、朝があった」と神は何度も繰り返す。この言葉はどれ程、慰めに満ち、希望に満ちた言葉であろうか。

「神は御自分にかたどって人を創造された」とあるが、当時の考えに神に似せて造られたのは王のみと考えた。王はこの世においての神であると教え、王を崇拜せよと命令した。ユダの民はその時代に人間は全て神に似せて造られたと信仰告白する。人間が神同様に崇拜の対象になるということではなく、神がご自分にかたどって人を創造されたことは、神が人をどれだけ愛しておられるかという現れである。決して人間が神同様に崇拜の対象には成りえない。たとえ王であってもという抵抗がそこにはある。捕囚の民として人間扱いされない状況の中で、神に愛されて造られた存在であることを確認することは、大きな喜びであり、希望であった。

沖繩の歴史もまた、琉球という時代があって、欧米国の列強国に脅かされ、日本という大国に占領され同化されてきた。そういう辛酸を嘗める歴史はなお続く。しかし神は、闇だけの世界、絶望の世界と思い込んでいたところに、光を灯してくださる。闇の世界に必ず朝が来ることを神は語ってくださる。「夕べがあり、朝があった」と。これはまた「苦難があり、喜びがあった」とも置き換えられよう。さらに新約の視点に立てば、「十字架があり、復活があった」となる。

この天地創造の物語は、時代的背景をもって、内側から見て行く時、今の時代にも、生きた神の言葉として、慰めと希望に満ちた平和のメッセージとして聞こえてくるのではないか。私たちの平和は、朝日のごとく訪れる。(神谷)